

研究論文

学生相談における家族支援の動向について

齊藤 美香 (北翔大学 学生相談室)

飯田 昭人 (北翔大学 人間福祉学部 福祉心理学科)

抄 録

従来、大学などの高等教育機関の学生相談においては、学生の家族が登場することは少なかった。しかし近年、不登校、引きこもり、危機的な状況下にいる学生が増加し、大学側が家族に直接コンタクトをとらざるを得ない場合が増えてきた。それに伴い、学生相談室のカウンセラーは家族の対応に苦慮することが多くなった。本研究では、北海道の大学の学生相談室に勤務するカウンセラーにアンケート調査を行い、家族支援の動向について検討した。

キーワード：学生相談・親-家族・親面接

I. はじめに

短大・大学・大学院・高等専門学校など高等教育機関の学生相談では、従来は来談した学生への個人カウンセリングが主な活動であった。それまでの小・中・高等学校と違い、学生の自主性に任せて、学生のみに対応するが多かった。学生自身も大学側も親に来談を要請するようなことを積極的にはしてこなかった。しかし、近年は引きこもり、不登校、生死に関わるケース、あるいは事件性のあるケースが多くなり、家族に直接コンタクトを取らざるを得ない状況が増えてきた。その一方で学生相談に携わっている関係者は家族への対応に苦慮しているものの、専門職として、具体的に何に苦慮し、どう工夫しているかについての研究は個別の事例研究はあるが、統計的な研究はほとんどされていない。

昨年、筆者らが行った2000年以降の学生相談分野における家族支援研究の文献調査でも、専門職への実態調査的な先行研究はなされていないことがわかった。

そこで、本研究においては、実際に学生相談に携わっているカウンセラーにアンケート調査を行い、家族への対応で苦慮している点、配慮している点、ひいては家族支援者として必要な資質を明らかにして、考察することとした。

II. 研究の方法

1. 調査対象者：北海道内の高等教育機関の学生相談室に勤務するカウンセラー40名(回収率75%)。性別は男性16.7%、女性83.3%、年代は30代36.7%、40代26.7

%, 50代以上36.7%、臨床心理士経験は5年未満10.0%、5~9年36.7%、10~19年33.4%、20年以上13.3%、勤務形態は常勤カウンセラー15.6%、非常勤カウンセラー75.0%、その他9.3%、相談室勤務経験は5~9年83.4%、10年以上16.6%である。

2. 手続き：アンケートを郵送し、回答を返送してもらった。調査時期は2009年10~11月にかけて実施した。アンケートは無記名とし、回答者のプロフィールと家族支援の有無・他機関との連携の有無と内訳・家族支援の内容については選択肢(具体的な内容についてはⅢ.結果と考察 1. 家族への支援実施状況 表2で示す)で回答してもらい、家族支援について苦慮している点、配慮している点、連携するにあたって配慮している点、家族支援に必要な資質については自由記述とした。

3. 整理法：自由記述については、記述内容を集約し、共同研究者である飯田とKJ法により、キーワード毎に分類したものをカテゴリー名として、それに該当する回答数を集計した。

III. 研究の結果と考察

1. 家族への支援の実施状況

家族支援については93.3%の人が何らかの形で実施している。その中でも家族と直接に会う、もしくは電話、手紙、メールなどの通信手段で直接コンタクトをとっている人が8割を超えていた。直接コンタクトをとらずに、学生本人との面接場面で家族をテーマにして取り扱うという間接的支援については25%の人が実施していた

(表1)。

家族支援を実施している人の中で、学生相談業務全体における、家族支援業務の割合の平均は8.5%（全回答者の家族支援業務割合の数値の総和を回答者数で除した数）であった。単純に比較はできないが、大島ら¹⁾による来談者実数の内訳比率で保護者5.8%という調査結果よりやや上回る。

表1. 学生の家族に関する支援や相談の実施状況 (複数回答)

家族支援	実施	直接面接	82.5%
		電話・手紙・メールなど	82.1%
		間接的	25.0%
	行わない		6.7%
家族支援業務の割合			8.5%

家族との対応が必要となるのは、学生のどのような問題に関わる時であるのか、問題別に関わる度合い（まったくない=1点、たまにある=2点、わりとある=3点、非常にある=4点）を回答してもらった結果（各内容別に回答者の点数を総和し、回答者数で除した平均値）は表2のとおりで、学生個人のうつ状態、睡眠障害などの精神科的問題が一番多かった。出席状況や成績などの学業上問題と、不登校・引きこもり等が背景にある単位取得不足による留年、休学、退学などの修学問題を合わせると平均値はいずれも高くなっていく。これらの問題は親が関与せざるを得ない場合が多いので、それに伴って、家族にコンタクトをとる必要が高くなるといえよう。

表2. 家族への支援が必要な際の学生の問題の種類 (4点法)

学生の問題	平均値
精神科的問題	2.6
学業上の問題	2.2
生活上の悩み	2.1
休学・退学など修学問題	2.0
危機的問題（自殺・犯罪被害・他害）	1.9
進路についての悩み	1.8
家族との情緒関係	1.7
経済的問題	1.4
その他	1.6

2. 家族への対応

1) 家族への対応での困難性

家族への対応について苦慮していること及び困難に感じていることについては表3、表4の通りである。家族とのコンタクトがとれるか否かという学生のことについて、家族と相談活動を開始する導入部での困難を挙げた

人が14名であった。保護者の共働きで、平日の日中だけでは連絡がとれないことが多く、更に、本アンケートの回答者の75%が非常勤カウンセラーであるため、毎日連絡をとり続けられる体制がとれない構造的な理由が重なって、コンタクトがとりづらくなっている。

また、仮に家族に連絡がとれたとしても、遠距離という理由で来てもらえないことが多く、電話相談だけだと込み入った話まですることが難しいという意見もあった。

高校までと異なり、親元を離れて暮らしている学生が多い高等教育機関ならではの特徴が導入部での困難の背景にはある。

学生本人が家族へ関わることを拒否することについては、「親へ連絡を取ることをいやがる学生が多い」という苗村ら²⁾の報告と重なる。筆者らの経験でも、家族関係が良好ではないと感じている学生は、例えば、単位不足が親に知られると叱責されるだろうということや精神科に受診が必要な状態になった際にはそのような恥ずかしいことを知られたくないという理由で家族に連絡をとることを拒むことが多い。また成人になった学生は「未成年ではないので親は関係ない」と言う理由で拒否することもある。未成年ではない学生に対して関わる際には、家族へ連絡すべきかどうか判断に迷いやすいという回答もあった。このような事態も高校までとは異なる大学の特徴である。

次に家族から学生本人の問題に対する理解を得られない、あるいは学生本人が自分の問題をあまり理解していないという困難さを挙げた人は13名であった。中でも最近、増加してきている発達障害の傾向がある学生への対応の難しさ³⁾を挙げた人が4名いた。これらの学生のほとんどは大学入学以前に診断がついていることはなく、小・中・高校と問題が顕在化せずに適応してきた、いわゆるグレーゾーンに属する学生であるので、家族や本人は大学入学後に問題が起こっても、受けとめるのが難しい。仮にその問題の状況が理解できても、家族や本人自身でさえも本人のやる気のなさや怠慢が原因と考える傾向があり、本人に合った支援までたどりつけないことがあるという記述が多かった。更に、学生と離れて暮らしている家族に対して、学生の日ごろの状況を伝えても理解が得られにくい。

医療機関の中でも精神科につなげる必要がある場合は家族に精神科医療に対する不安感があることが多く、家族の感情に留意しながら、慎重に取り組む必要があると述べた人は6名であった。

また、家族自身が障害を抱えている、精神的に不安定である、あるいは経済的困窮状態である場合は家族が学生に関わる余裕がないと指摘した人も3名であった。

いずれの場合もカウンセラーが家族に連絡をとると、

最初は家族からの怒りや拒否など否定的態度に遭遇することが多いことが明らかになった。大学側にさじを投げられたように感じる家族もいるという指摘もあった。

技法的な困難さは教職員との連携を2名が挙げている。その内容は誰が家族の窓口になるか、役割分担をどうするか、守秘についてはどうするかであった。

困難なしと回答した4名については、家族支援が必要なケースの経験がない、自主来談の家族のみを対象としている、家族への支援は教員が担当しているという理由であった。

表3. 家族への対応について苦慮していること (複数回答)

内 容	件 数
①家族の理解が得られない	11
②コンタクトがとれにくい	7
③学生本人が家族へ関わることを拒否する	4
④教職員との関係 (役割分担、守秘)	2
⑤カウンセラーが非常勤なので対応難しい	2
⑥本人の自己理解があまりない	2
⑦家族へ連絡すべきかどうか判断に迷う	1
⑧同席面接の方法	1
⑨困難なし	4
計34	

表4. 家族への対応について苦慮していることのカテゴリ分類

内 容	件 数
1. 導入部での困難 (②・③・⑤・⑦)	14
2. 理解を得る困難 (①・⑥)	13
3. 技法などの困難 (④・⑧)	3
4. 困難なし (⑨)	4
計34	

2) 家族への配慮

家族に対して配慮していること、大切にしていることについては表5、表6のとおりである。保護者の立場を尊重するという回答が一番多かった。ラポールを形成するためには家族と敵対することなく協力していく姿勢を貫くことが必要であり、家族が学生相談室を訪れることへの心情を思い、忙しい中、遠方からわざわざ来談したことへの感謝と労いの姿勢を示し、これまで学生を育ててこられた家族の価値観などを尊重するという意見で占められた。「相談に訪れる人の緊張や不安は強く、通常の状態にはない」⁴⁾、「我が子が苦難の中にあることを知らされて平気でいられる保護者はおらず、不安になり混乱することは必至」⁵⁾なので、カウンセラーは導入部での家族からの否定的態度に遭遇することが多い。「治療者が最初に親の現状を理解し、その気持ちを汲みとらなくては、いかなる忠告も理解され、受け入れられない」⁶⁾ので、まず家族との信頼関係を築くことに配慮す

ることが大切だと考えるカウンセラーが多いことが明らかになった。また、大学側にさじを投げられたと感じる家族もいるので、カウンセラーが協力していきたいという姿勢を打ち出すことの重要性も多く述べられていた。

学生の問題に対応する際は学生の不適応の状態だけではなく、プラスの資質について着目し家族に伝えるようにする、また家族のマイナス要因ばかりにとらわれず、援助に活用できる家族の力を見つけるよう努めるなどのスタンスに言及した人が6名であった。「家族の病理性や問題よりも可能性に焦点を当てて支援する」⁷⁾、「家族がもつ内的資源をまず尊重し、潜在可能性を信頼」⁸⁾するアプローチが浸透していることがうかがえる。

情報伝達については、現状から対応までの広く正確な情報を提供する点と学生に個人情報をごとまで家族に伝達するかの点についての回答があった。前者の場合、カウンセラーが家族とコンタクトをとる必要がある時は留年、休学などの学業上の問題や病院紹介など危機的な状況であるのがほとんどであるので、学生のおかれている状況及び紹介先についての正確な情報、問題の対処方法や具体的支援方法をきちんと家族に伝える必要がある。

家族はそれを踏まえて対処していくわけであるが、高校までであれば、学級担任を窓口にするだけで事足りていた。しかし、大学のシステムは複雑であり、いざ、家族が学生のことで大学側に問い合わせをしたくても、どの部署にアクセスするかわかりにくい。カウンセラーは学内事情を周知した上で、必要に応じて家族に問題(休学・退学・復学・進路変更・単位取得等)に適した部署への繋ぎ手としての役割を担う必要がある。それでも家族が困った際には、気軽に学生相談室にアクセスしてもらう為に相談室の体制やメールアドレス等を積極的に伝える必要性も指摘された。

後者の場合、家族と連絡をとる際は事前に学生と会い、家族に伝える内容について合意を得ておくことが必要であるという回答をした人が3名であった。最近では保護者に学生の成績を送付し保護者懇談会を開催する大学も増えてはきているものの、学生の成績に関しては大学側と学生がとり交わしている個人情報の一部であることも多いので、特に単位や成績について、家族に伝える際は慎重な対応が求められる。

技法的な配慮としては、問題を整理し、焦点化することと、情報伝達の内容によっては相談室ではなく、他の教職員と連携をとって、より適切な部署が窓口になるよう工夫しているという意見があった。

家族全体の力動を考えるとという回答をした人の意見では、学生本人だけの話を聞いても一方的な話になることがあるので、家族全体の状況を見極めることの大切さや、家族の中でどのようなサポートが可能か見出すため

に家族全体の力動を理解することの必要性が挙げられていた。

表5. 家族に対して配慮していること (複数回答)

内 容	件 数
①保護者の立場を尊重する	13
②学生や家族のプラス面をみるスタンス	6
③情報を伝える、情報をもつ	6
④学生と家族と連絡する前に話合う	3
⑤家族全体の力動を考える	3
⑥協力していく姿勢	2
⑦問題を焦点化する	2
⑧教職員との役割分担	1
計36	

表6. 家族に対して配慮していることのカテゴリー分類

内 容	件 数
1. 姿勢 (①・②・⑥)	21
2. 情報伝達 (③・④)	9
3. 技法 (⑤・⑦・⑧)	6
計36	

3) 学生相談室以外の部署との連携

家族と対応する際の学生相談室以外の機関との連携状況については表7のとおりである。ほとんどの人が実施している。

表7. 学生の家族への対応の際の学生相談室以外との連携の実施状況

連 携	実 施	85.7%
	行わない	14.3%

表8. 連携する機関の内訳 (実施者の内) (複数回答)

内 訳	件 数
ゼミ担当など担当教員	83.3%
それ以外の教員	58.8%
職員	70.8%
保健センター・医務室	79.2%
その他の学内部署	25.0%
医療機関	45.8%
その他の機関	4.2%

連携を実施している人の中で、連携する機関の内訳については表8のとおりである。ゼミ担当教員などの教員との連携が一番多く、次に保健センター及び医務室との連携であった。多くの大学で、担任制が浸透してきていること、学生相談室が保健センターや医務室と隣接しており、常勤看護スタッフが配置されている大学がほとんどであるため、連携が多いと考えられる。大学部署の内訳は就職課、学務課、発達支援センター、図書館であった。その他の学外の機関の内訳は警察、消費者セン

ター、学生寮などであった。本節第一項「家族への支援の実施状況」で述べたように、家族支援が行われるのは学生の精神的問題が一番多かったが、医療機関との連携は45.8%と少なく、医療機関と連携することの困難さが示された。

連携する上で大切なことについては表9のとおりである。設問が「他部署との連携において」と明確に提示しなかったために、家族と連携する上での点と他部署と連携する上での2点に回答が分かれてしまった。家族と連携する上で大切なことは「両親は共同治療者である」⁹⁾、家族と共に考えるという姿勢や家族が学生にとっては第一の支援者であるという視点に立ち、家族や学生を中心に支援を考える姿勢であることが挙げられた。これは「親・家族は学生に対して現実的な働きかけを日常的に提示できる立場にある」¹⁰⁾という視点によるものである。一方、他部署との連携する上で大切なこととしては、情報の共有の仕方と守秘の両立、役割分担についての回答が多かった。信頼関係を築くことの重要性については家族においても他部署との連携の上でも挙げられていた。

表9. 他部門と連携する上で大切なこと (複数回答)

内 容	件 数
①情報の共有と守秘	9
②信頼関係を築く	7
③教職員との役割分担	4
④共に考えるという姿勢	4
⑤家族が学生にとっては第一の支援者という姿勢	3
⑥専門家としての或いは学内の知識に精通する	2
計29	

表10. 他部門と連携する上で大切なことのカテゴリー分類

内 容	件 数
1. 姿勢 (②・④・⑤)	14
2. 情報 (①)	9
3. 技法 (③・⑥)	6
計29	

4) 援助者としての資質

家族支援において、援助者として必要な資質については表11、表12のとおりである。姿勢について挙げた人が一番多かった。その内容は誠実さ、暖かさ、謙虚さ、理論でごまかさない、実直さ、やさしさと厳しさ、バランス感覚、節度ある態度、丁寧さ、柔軟さ、共感しようとする態度がであった。

次に多かった専門性についてはBecvarら¹¹⁾が家族療法家になるための課題の一つとして挙げている「システムテックな思考法を身につけること」に通じる家族

ダイナミクスを理解できる知識や学業に関する学内の情報、医療に関する情報や社会資源の情報を身につけることと、発達や病理のアセスメントができること、カウンセラー自身が自己理解を深めていることが挙げられていた。

これらの専門性を遂行するための能力で必要なものは、学生本人・家族・他機関との連携が必須となるので、集団の力動に巻き込まれない冷静な判断力、具体的に環境を調整していける能力、家族にも他機関の人にもわかりやすく説明できる言語能力、「平易な日本語で自分の言葉で話す」¹²⁾を挙げる人が多かった。これらの能力の土台として、日ごろから教職員と信頼関係を築いていく必要性に言及していた人もいた。狭義な意味で個人心理療法を行う臨床スタイルを持ったカウンセラーに必要とされる資質とは異なり、積極的に多くの人と良好な関係を築き、具体的に働きかけていく、いわゆるソーシャルワーカー的なスタンスの必要性についても述べられていた。

人生経験の必要性を述べた人が多かったのは、本アンケート回答者の年代が30代以上であったこと、臨床心理士としての経験が10年以上の人が約46%と比較的中堅以上の年代が多かったことも要因と考えられる。子育ての経験があると親の立場をより理解しやすかったり、幅広い経験が役立っていたり、いろいろな親がいるので人生経験を積んで人間的に成熟しているに越したことはないと言及する人がいた。

表11. 家族支援において、援助者として必要な資質（複数回答）

内 容	件 数
①姿勢	14
②人生経験	5
③家族療法の知識、ダイナミクスを読む力	5
④情報・知識	5
⑤冷静な判断力	3
⑥具体的環境調整能力	2
⑦わかりやすい言語能力	2
⑧発達、病理のアセスメントができる	2
⑨敏速さ	1
⑩ソーシャルワーカー的視点	1
⑪わからない	2
計40	

表12. 家族支援において、援助者として必要な資質のカテゴリー分類

内 容	件 数
1. 姿勢 (①)	14
2. 専門性 (③, ④, ⑧, ⑩)	13
3. 能力 (⑤, ⑥, ⑦, ⑨)	8
4. 経験 (②)	5
計40	

3. まとめ

本研究では、①家族とまずコンタクトをとり、協力体制が作れるかどうか、導入部についての困難が多く、その要因としては、高校までとは違う大学の特有な事情によるものが考えられた。②学生の状況を家族が把握しにくく、家族や本人の理解を得る困難がある。③これらの困難に対処するために、カウンセラーは技法よりも家族の心情を思い、家族の立場を尊重し、協力していく姿勢をうちだすことに配慮している。④家族への支援は学生相談室だけではなく、他部署との連携が必要であること。連携の際には信頼関係を築くことに配慮し、役割分担や情報の共有の仕方に留意する。⑤多くの人と連携をうまくとっていくことが必要であるので、信頼を得られるような姿勢と人生経験、高い専門性が援助者としての資質として必要である。ことが明らかになった。

大学が狭き門と言われた時代においては学生を「自立した大人」として扱い、大学に保護者を始めとする家族が登場することは少なかった。しかし全入時代となった現在、学生を「自立した大人」として扱うのは難しくなっている。このような現実と直面している大学は「保護者は学生の人間的な成長に関して協力し合うパートナー」¹³⁾として認識することが求められている。

学生の問題で大学が家族に連絡をとる必要が生じる場合は数としては多くはないが、起こった際に家族に協力してもらおうとしても導入部で困難が生じやすいということは本研究の調査でも明らかになった。この困難を減らすには、学生相談室のカウンセラーだけが本研究で示されたような様々な点に配慮し奮闘したとしても限界がある。この困難を乗り越えるためには、大学がいかに入学期から家族と信頼関係を築けているかが鍵となると考える。まずは大学全体が“開かれた大学”として、取り組む必要があるであろう。保護者の出席が多い入学式後に学生と保護者へのオリエンテーションを行い、学生のメンタルヘルスへの協力依頼を行う大学も増えてきている。また大学内のキャンパス情報誌を保護者に送付する、ホームページに保護者向けのお知らせを掲載するなど、大学活動の情報を積極的に発信する大学もある。保護者に成績を送付し、保護者懇談会を開催し、保護者を対象とした就職ガイダンスを行う大学も増えつつある。このように日ごろから保護者に大学や学生生活についての情報を提示し、関係が築けていると、いざという時にスムーズな協力体制がとりやすくなると推察される。大学が学生や家族から信頼を得ているという土台があって初めて、学生相談室が家族に適切な家族支援を行える機関として機能すると考えられる。

より広い意味においては、大学における家族支援は、学生生活に支障が出た学生の家族のみにされるものでは

なく、“人間的な成長”を支えるという視点にたち、全学生の家族に対して普段から幅広く行われる必要があると考えられる。

pp191, 2000

- 13) 玉 真之介：保護者への情報提供と連携, 大学と生活 第77号, pp6-10, 2010

Ⅳ. お わ り に

今回の調査研究は北海道内における学生相談室に勤務するカウンセラーのみを対象として行った。今後は対象を広げるとともに、更に詳細な検討を加えたい。また当事者である家族が受けた支援をどう感じ、考えているのかについてもインタビュー調査などで明らかにしていくことが今後の課題として考えられる。

稿を終えるにあたって、本アンケート調査に協力頂いた道内大学、学生相談室カウンセラーの方々に謝意を表するとともに、アンケート調査作成の際にご尽力頂いた北翔大学人間福祉学部福祉心理学科 川崎直樹先生に深く感謝申し上げます。

尚、本研究は平成20年度及び21年度、北方圏学術情報センター研究費の助成を受けて実施した。

《引用文献》

- 1) 大島啓利他：2006年度学生相談機関に関する調査報告, 学生相談研究 第27巻 第3号, pp. 238-273, 2007
- 2) 苗村育郎ら：第3分科会のまとめ, メンタルヘルス協議会平成18年度報告書, pp. 19, 2008
- 3) 岩田淳子ら：発達障害の学生への理解と対応に関する研究, 学生相談研究第25巻第1号, pp32-43. 2004
- 4) 後藤雅博：家族への心理教育的アプローチ, 学校臨床における家族への支援, 日本華族心理学会編集, 金子書房, PP172-183, 2001
- 5) 山本大介：苦難を抱える学生への支援, 大学と学生 479号, pp. 15-24, 2004
- 6) 村瀬嘉代子：子どもと家族への統合的心理療法, 金剛出版, pp177, 2001
- 7) 山下英三郎：スクールソーシャルワークの技法に学ぶ, 前掲3), PP82-95, 2001
- 8) 前掲6) pp152
- 9) 下坂幸三：心理療法のひろがり, 金剛出版, pp 89, 2007
- 10) 齋藤憲司：親・家族が関与する相談事例への構えと対処, 学生相談研究 第27巻第1号, pp. 1-13, 2006
- 11) Becvar DS & Becvar RJ：Family Therapy (5th Edition), A Systematic Integration. Basic Books, NY, pp563-592
- 12) 村瀬嘉代子, 青木省三：心理療法の基本, 金剛出版,

Family support in student counseling

Mika Saito Hokusho University Student Counseling Office

Akihito Iida Hokusho University School of Human Services Department of Psychology for Human Services

Abstract

Advantages of counseling a client together with the parents and family members of the client are often stressed in the field of student counseling. In the past, parents of university students and their family members have not often attended counseling centers of higher educational institutions. Recently, the numbers of students that refuse to go to school and are withdrawn, or face crises have increased. As a result, the need for contact with their parents has also increased. A questionnaire survey of recent trends in family support conducted with counselors working in a university in Hokkaido is reported.

Key words : Student Counseling, Parents and family members, Parents Counseling